日本歯科医史学会会誌・第13巻
第3号通巻48号・昭和62年3月

『明月記』にみえる苧について*

杉　本　茂　春

1

定家『明月記』私抄（堀田善衛著　新潮社『波』1986, 20巻3号所収）は「歯取リノ老嫗を喚ビ，歯ヲ取ラシム」とよびかけ，

医術の未発達な頃の人々の日記を読むことは，当方にもある種の苦痛の感を与えるものであり，まして，歯が痛み出したときに，「歯取リノ老嫗（＝老婆）ヲ喚ビ，歯ヲ取ラシム」（8月22日）などと書かれると，当方までが歯が痛くなって来るかに思うのである．

歯医者というのではなくて，歯抜き専門の老婆がいたものらしく，ずっと後年（寛喜2年4月4日）の記によると，「苧（カラムシ）ヲ付ケ，少年嬰児ノ如クニ引落シ了ンヌ」とあるから，苧，すなわちイラクサ科の多年草の皮から取った糸で痛む歯や「朽歯」をくくって，「引落シ」をやったもののようである．

まったく同情の念を禁じえない．痛む歯は抜くより他に法がなかったのであろう．

と書いている．

これをうけて，日本医史学会，森　納先生から信書をいただいた．

2

森　納先生の信書――

歯抜き老婆が「苧（カラムシ）ヲ付ケ」歯を抜いたことが書かれております．堀田氏は苧の糸と解しているようですが，苧麻は加良牟之，加良無之，於，として本草和名，和名抄にも出ており，漢書，新修本草，本草綱目にも葉を以て主治「金瘡，傷折血出瘀血」とあり，江戸時代初期の民間薬集「救民妙薬集」（水戸光圀侍医　穂積甫庵著）82に，「打身ノ薬」として苧麻を酒と混ぜて服用させております．

小生の愚考ですが，苧麻を糸にしたというより，歯茎に塗りつけたか内服させたと考えられるのですが如何なものでしょうか．

小野蘭山の本草綱目啓蒙にも，「野苧麻葉ヲ乾シ揉テ綿ヲ取，用テ能血ヲ止メ，ソノ根打撲腫痛ニ効アリ」とあります．抜歯に当っての止血，痛みどめとして使ったとしたらどんなものでしょうか．

何事でも歯のことは先生にお尋ねするなりご連絡申しあげて……略（3月17日付）

3

お尋ねといいながら，ここまで深く教えて下さったので，私は，苧，そのものを調べてみることにした．

漢字の原典といわれる『説文解字』に苧の記載はない．

漢代，黄河流域の中原文化圏ではまだ知られていなかったにちがいない．少なくとも野草の繊維を紡いで作った糸で，揺るぐ歯を縛り，引きむしるようにして抜去しようという抜歯法そのものを知っていたかどうかさえつまびらかではない．もし，そのような抜歯法を知っていたなら，すでに説文には糸の類，糸・絲・縄・緒を記載しているのだから，わざわざ苧を求めなくてもよいはずである．

また，説文を底本としたと考えられる『篆隷万

* Plant (Karamusi, Cho, O) in "Meigetsuki" which is the dialy of Fujiwara Teika

象名義』(空海撰) にも苧はみえない.

『切韻』(隋, 陸法言撰) はいくたびかの改訂を経て『唐韻』,『広韻』とよばれた.

官版『広韻』(大宋重修本) 5巻, およそ26194言, 注釈191692字を精査したが, 苧の記載はなかった.

『一切経音義』(大正新修大蔵経54) 100巻にも, 苧の記載はない.

4

官版『集韻』10巻は, 宋, 丁度ら勅を奉じて『広韻』を改訂, 新しく27331字を加えて53525字とした. ここに初めて6字,「苧; 艸名, 可為縄」と記載された.

『音韻述微』(四庫全書珍本初集) 30巻には,「苧; 草名, 縄索を為るべし. 又, 越に苧羅山有り, 通じて紵に作る」として15字を加えている.

『正字通』(明, 張自烈撰) 12巻には,「苧; 尺主切, 除の上声, 麻の属, 高さ六七尺, 葉は楮(こうぞ)の如くして叉無し. 面青く, 背白くして短毛有り. 数十茎を科生し, 宿根を土中に蔵す. 春に至れば自ら生ず. 一歳に三たび刈剝し, 皮を取り, 竹を以て其表を刮(けづ)り, 裏筋の如くなる者を得, 之を煮て用って布を緝(つむ)ぐ. 麤(粗) なる者は縄を為るべし, 本草に李時珍曰く「苧」は家苧なり. 又, 山苧野苧あり. 紫苧は葉面紫, 白苧は葉面青し. 背皆白く, 根皆刮るべし. 洗煮して食すれば荒を救ふと. 本草に曰く, 苧根を取り, 米粉を和えて餅(へい)と為し饑を禦(とど)む. 味甘美なり. 医方, 苧は安胎・治心・隔熱を主(つかさど)り, 痰嗽には苧根を用ふ. 煆(や)きて性を存し, 末と為し, 生豆腐もて蘸すること三五銭, 之を食するに効あり.

苧通じて紵に作る. 詩陳風東門之池, 以て紵を漚すべしと, 紵苧同じく艸に从ひて一なり. 説文に苧艸縄を為るべしと, 布を為るべしと詳言せざるは是に非ず. 今南越の紵布は皆苧をもて之を為る. 又俗, 苧を呼びて苧麻・麻枲と為すなり. 枲と苧とは種を異にす. 苧は枲より精白なり. 故に詩に以て麻を漚す可しと云ひ, 又以て紵を漚すべしと云ふ. 陸璣云ふ, 紵も亦麻なりと. 合わせて一物と為すは非なり. 又. 漢書の相如の賦蔣芧の註に, 蔣は茭なり, 芧は小栗なり, 苧を指して言ふに非ずと. 漢書音義に張揖曰く, 芧は三稜なりといふは誤りなり. 三稜は本草薬部に詳し. 芧と苧とは類を殊にすと. 旧本張揖の説を引き, 苧の註を附すに, 前の芧と誤り, 芧は即ち苧に同じと註す. (竹鼻広三先生訓)

と, 懇切な註釈303字を加えて, あますところがない.

これら一連の註釈・註記からみても, 苧は本来中国中原文化圏に由来するものではなく, 南方文化圏のものであっただろう.

漢代にはまだ苧そのものを知らなかった.

宋代, ようやく苧の繊維をよりあわせて, 糸状の縄索を作ることを知った.

明代に至って, 苧を紵布として利用すると同時に, 救荒食品としてその根を食用にも供し, 止血・知覚鈍麻, 安胎などの薬用効果のあることを知った.

中国漢民族は, 苧を初め南方文化の産物としてうけとめ, 次第にその利用度を広げていった. そうした事情を, 説文, 切韻, 唐韻, 広韻, 集韻, 正字通は如実に示して, 中国歴代発展史を物語っているといえよう.

5

また, 韓国, 奇昌徳氏は『本草綱目』韓国版を引き, 苧麻は紵に作る. 績みて苧糸とする. 故に之を紵という. 麻糸の細なるものを絵とし, 粗なるものを紵と為す. 根の気味は甘にして寒. 無毒.

『管子』を引いて, 首戴苧綏, 頭巾とするなどの例を掲げ, 苧根の生汁を針に付けて痛歯の周囲の歯肉に刺し, 歯の動揺をうながして抜歯を容易にする. その際, 止血, 知覚鈍麻の薬効によって苦痛が少ないと言い, 成書伝来のルーツ, 中国文化東漸の径路を明らかにされた.

6

日本では和銅5年 (712)『古事記』(太安万呂撰), (倉野憲司校注, 岩波文庫) に次の歌謡6がある.

八千矛の（夜知富許能）……吾はもよ　女にしあれば　汝を除て　男は無し　汝を除て　夫は無し　綾垣の　ふはやが下に　苧衾（牟斯夫須麻）柔やが下に　栲衾（多久夫須麻）さやぐが下に沫雪の　若やる胸を……豊御酒　奉らせ.

とあって，カラムシで作った寝具のやわらかな下で，カジの木の繊維で作った白い寝具のざわざわとしている下で……と注記がある.

古事記の撰者太安万呂はこの時すでに苧カラムシの繊維で織った紵を知っており，しかも，カラムシとよんでいたことが想像できる.

むしふすま（牟斯夫須麻），ムシと発音していた無文字時代のよみ（訓）を牟斯と音写していた.

牟；牛鳴也从牛象其声气从口出，莫浮切.

（説文）牛の鳴声を模した音，ムォー.

斯；析也从斤其声，詩曰斧以斯之，息移切.

（説文）詩経のなかの一節のように，まさかりを振るってチョウと打てば，枝はハッシと折れる，その音．シッであろう.

昔から万葉仮名は，単なる当て字のように言われてきたが，ここにみるムシ，牟斯はギィー　カタン　ギィー　カタン　とはた（機）を織る意を充分にふまえた音写であったように感じられる.

7

南方系民族の通過儀礼の一種，口淫風習を伴った婚姻儀礼をいろ濃く伝える「歯取ノ老嫗」がいて，定家卿の抜歯を担当した.

抜歯の一方法として，苧糸が用いられた.

苧麻根には，止血，知覚鈍麻の薬効のあることを知っていて，タコ糸のような苧糸で痛む歯の歯頸部を縛っておくと，歯頸部の歯肉を圧迫して，歯肉の萎縮，剝離を助け，一層歯の動揺を誘い，抜歯を容易ならしめたであろうことが想像される.

因みに，古記録によると，歯取老嫗は都の場末，京極辺に住んでいた.

稿を終るにあたり，いろいろと，ご指導ご助言を賜わった，森　納氏，宗田　一氏，芝田真珠郎氏，奇　昌徳氏，竹鼻広三氏，念仏貞夫氏，高松敏男氏に深く感謝の意を表します.